

ハルヒはオワコンなのか?
(誌上シンポジウム『涼宮ハルヒの憂鬱』)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 伸一朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009222

ハルヒはオワコン¹なのか？

Is It True That Haruhi Is “Ended Content”?

原田伸一朗

Shinichiro HARATA

静岡大学情報学部・講師

harata@inf.shizuoka.ac.jp

I アニメの場合

原作のライトノベルが大ヒットし、アニメ化・映画化も成功をおさめているはずの「涼宮ハルヒの憂鬱」であるが、アニメ第1期のシリーズ演出を担当した山本寛によると、意外にもハルヒは失敗作であると言う²。

これは、ファンの間で今でも語り草にされるアニメ第2期の「エンドレスエイト」の失策³という分かりやすい理由によるものではなさそうで、ハルヒは「ポスト・エヴァ」になりきれなかったからというのが真意のようである。アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」がテレビで初めて放送されたのは1995年のことであるが、それ以来、エヴァを超える社会的ブームを巻き起こしたアニメはないと言う。それはひとり山本のみならず、アニメ関係者共通の認識にもなっているようで、アニメ界において、いかにエヴァが「神話化」され、乗り越えるべき「壁」として捉えられているか、いまだエヴァを総括しきれていないかをうかがわせる。同作の監督・庵野秀明は、「エヴァを超えるものはエヴァしかない」という衝撃的な所信表明文⁴を発表し、旧作の「リビルド」版「エヴァンゲリヲン新劇場版」四部作の制作・公開を進めている。この10余年のアニメ界を「呪縛」してきたキーワードの一つが、良かれ悪しかれ「ポスト・エヴァ⁵」であったことは間違いないと見てよいであろう。

う。

ふたたび山本によれば、アニメ界は、エヴァのような社会現象となる大作が、10年に1度は現れることを待ち望んできたと言う。2006年にテレビアニメが放送された「涼宮ハルヒの憂鬱」は、この「10年1本」説によれば、時期的にもまさにぴったりで、「ポスト・エヴァ」の最有力候補とみなされた。今でも「ハルヒ=ポスト・エヴァ」説を唱える者はいるであろうが、当の山本によれば、ハルヒは失敗作。エヴァにあってハルヒに欠けるものが、商業的成功にあるか、社会的認知度にあるか、作品そのものにあるかは判然としない。

単にブームというなら、ハルヒと同じ京都アニメーション作品「けいおん！」は、「聖地巡礼」や、音楽CDのオリコンチャートイン、映画のメガヒットなど、ハルヒに勝るとも劣らないほど、一般層にも浸透し、社会現象になった作品と思われるのであるが、決して「けいおん！」が、「ポスト・エヴァ」という枠組みで位置づけられることはないし、ユリイカで特集されることもない。何か深遠な哲学的テーマを描いている（ように見える）まさにエヴァのような作品や、少なくともSF作品が「ポスト・エヴァ」の候補として語られ得るのであって、いわゆる「日常系」「空気系」の「ゆるふわ」な作品⁶は、アニメ史の正統からは恣意的に除外されている

のであろう。つまり、「エヴァっぽく」なれば「ポスト・エヴァ」とはみなされない。恋意的というなら、そもそもスタジオジブリ作品が「ポスト・エヴァ」の地位を争うこともない。

まともなアニメ批評の対象になり得る作品として、あいかわらず「戦闘」というモチーフや、メタフィクションやループなど物語上の仕掛けが必要というなら、2011年に彗星のごとく登場したアニメ「魔法少女まどか☆マギカ」は、一躍「ポスト・エヴァ」の大本命に躍り出た。しかし、これも山本の診断によると半歩エヴァには及ばないらしいが、その理由は本稿のテーマから外れるので描く。いずれにせよ、「まどかブーム」の到来によって、ハルヒは徐々に、アニメ史における「ポスト・エヴァ」の地位からは後退させられつつあるように思われる。

II ラノベの場合

言うまでもなくハルヒの本領は、谷川流による原作小説にある。2011年、久々の新作『涼宮ハルヒの驚愕』が刊行され、初版発行部数100万部⁷という、衰えぬ人気を見せつけた。

これまで涼宮ハルヒシリーズは、2003年に発表された第一作『憂鬱』に始まり、『溜息』『退屈』『消失』『暴走』『動搖』『陰謀』『憤慨』『分裂』と、コンスタントに新作が刊行され続けてきた。しかし『分裂』以降は新作が途絶え、続く『驚愕』が発表されるまで実に4年の月日を要した。作者がスランプに陥っているのではないかと、様々な憶測も囁かれた⁸。ともあれ、最新作『驚愕』は、発売までのカウントダウン、初回限定版の事前予約、「世界同時発売」など、さまざまな仕掛けとともに鳴り物入りで発売され、版元の角川書店が、いかに「ハルヒの新作」をピッケイメント（事件）として捉えているかが分かる。これまで1年と待たせず新作が次々に発売されていたが、今後は、一作一作がお祭り騒ぎになるのであろうか。

さて新作の『驚愕』は、その前作の『分裂』からの続き物となっているが、4年のブランク

がありながら、パラレルワールド（並行世界）を描くという複雑なストーリーを力技でまとめて物語を収束させた作者の力量には素直に感嘆させられた。『驚愕』初回限定版特製小冊子のあとがきで、今後の計画として短編ネタをいくつか、と作者は記しているので、物語構造を搖るがすようなハードな展開はいったん今作でやめ、キャラのたわいもない日常描写がメインの物語に戻っていくのであろうか。

『分裂』～『驚愕』は、佐々木さん（下の名前は不明）というハルヒの「ライバル」的存在が新キャラとして登場し、彼女を頭目（新たなる神候補）として担ごうとする「佐々木団」（とファンの間で呼ばれている）が、「SOS団」のオルタナティブ（偽SOS団）の座を狙うストーリーである。これは、ハルヒの唯一神的存在性に対抗軸を設けるという、ハルヒの物語における最大のチャレンジであった⁹。

しかし、本作のテーマであるところの、世界を脅かすハルヒの憂鬱・イライラも、結局はキヨンとの恋愛成就の問題に還元されるという「セカイ系」の枠組みで言えば、佐々木の登場も、キヨンという1人の男と、ハルヒ・佐々木という（対照的でありながら、実は似たもの同士でもある）2人の女による、極めてベタな三角関係を形成するものにすぎない。佐々木はキヨンの中学時代、彼の最も側にいて、彼と心を、言葉を通わせた女子である。そんな彼女の「参戦」により、元クラスメート・佐々木と現クラスメート・ハルヒによる、キヨンを巡る静かな「恋の鞘当て」が始まった。実際、ネット上には、こうした構図の二次創作SS（ショートストーリー、サイドストーリー）が溢れており¹⁰、つまり、ファンにはそういう受け取り方をされているということなのである。SFの体裁を取りつつも、実際は「ハルヒの恋敵あらわる」というベタな展開にすぎず、放っておいてもファンが同人でやるようなネタを、公式でやったということなのであろうか。実はキヨンにはハルヒと出会う前に仲の良い女子がいた、という唐突

な新キャラの登場のさせ方、同人的に言えば「燃料投下」は、作者の驚くべき着想というよりも、最近のマンガやラノベにはありがちな話である。ネタが尽きれば新キャラを登場させる。今まででは姿を見せなかつた「姉」や「妹」、「幼なじみ」がいたことにする。

それでは今後のハルヒの展開はどうなるであろうか。作者の言うとおりであるとすれば、しばらくは、ゆるいエピソードで読者を楽しませてくれるであろう。オタク的には「学園エヴァ¹¹」の方が楽しい（？）のであるから、これは決して皮肉ではない。しかし本稿は、むしろ作者がハルヒをどのように終わらせるかに関心がある。この物語は、最終的には「情報統合思念体¹²」という謎の存在に決着をつけないと、終息しないであろうと思われる。つまり、ありていに言えば、情報統合思念体こそが「ラスボス」（最後の敵）になると予想する。

ところで、「情報」とは実体のないものである。ならば情報統合思念体は、どのような造形で描かれるであろうか。それは、何らかの「実体」を伴って現れるのであろうか。アニメ化するなら、キャラ化は必須である。よく誤解されているが、長門有希は、情報統合思念体によって造られた「対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース」であって、情報統合思念体そのものではない。人と接触するために造られたのであるから、人間の姿形をしているのは当たり前である。しかし情報統合思念体そのものを、もし「人間」として登場させてしまったら、肉体を持たないがゆえに物質界の摂理から超越した存在でいられるという「情報生命体」の特権性を失ってしまう。とはいえ、何でも（国家でも鉄道でも OSでも）「擬人化」して萌えやカップリングの対象にして楽しむというのがオタク国家日本のお家芸であるとするなら、最も抽象的な概念である「情報」さえ、キャラクター化してしまえるのであろう。

すばり、情報統合思念体は、「イケメン」として現れ、キョンと対決する¹³。この物語にお

ける「戦い」とは何か、その後に訪れるハッピー・エンドとは何か。それは、「イケメン」を倒して、キョンとハルヒが結ばれることである。別の言い方をすれば、ハルヒにとってキョンが特別な「普通の」存在であることを確認することである。

もともと長門、朝比奈、古泉というSOS団の3人のメンバーは、退屈なハルヒを楽しませるために「呼ばれた」にぎやかにすぎない。しかし、宇宙人でも未来人でも異世界人でも超能力者でもない、普通の男子高校生であるキョンがSOS団に導かれた理由は、まだ本編では明かされていない。作中でもキョンがその疑問を自問している描写があるが、おそらくこれが物語最大の謎であろう。しかし、答えはすでに出ている。ハルヒは、超常的なものを求める破天荒な少女として描かれつつも、その実、意外に普通の女の子であり、平常を尊ぶ常識人もある（と、これも作中でささやかに強調されている）。オタクの間では、ハルヒは非常識なわがまま女としてキャラ付けされているが、実はそうでもない。宇宙人・未来人・超能力者というおもしろおかしい規格外の存在に囲まれつづも、恋人となると、ハルヒはキョンという極めて平凡な男子を特別な存在として選ぶのである。

これまでのエピソードは、みくる、長門（『消失』）、佐々木（『分裂』～『驚愕』）らの「誘惑」を、キョンがいかに払い除け、ハルヒを選ぶか、ハルヒに帰ってくるかに焦点化されていた。しかもハルヒは行動しない（こと恋愛になると奥手な少女なので）。キョンが勝手に選び取ってくれるのを待つだけである。次は、キョン側のライバル、すなわちイケメンとして現れた情報統合思念体に、ハルヒがいっとき心を奪われてしまう。そして、キョンとイケメン思念体がハルヒを巡って争うという、極めてベタな展開を予想してみる。

万一、涼宮ハルヒの物語がこんなふうになるとしたら、ハルヒという作品の特権性は怪しく

なり、数多あるコンテンツの一つとして消費されるだけになってしまふであろう。それはそれで見てみたい気もするが、作者が予想を完全に裏切ってくれることを期待する。

III ドラマの場合

最後に、「涼宮ハルヒの憂鬱」が実写ドラマ化されるというまことしやかな情報がネットを騒がせたことがある。まさかとは思うが、ファンが誰も望まないドラマ化は、それこそオワコンの証（兆し）であるとも言い添えておこう。

注

1. ネット上のスラングで、ブームが去って人気がなくなった「終わった」コンテンツを揶揄して言う言葉。
2. 京都大学11月祭の企画として、京都大学アニメーション同好会の主催により2011年11月26日に開催された講演会「ヤマカン凱旋！～山本寛の軌跡と奇跡～」における山本寛の発言による。
3. ほとんど同じエピソードを、8週にわたり放送した。ネタとしては面白いし、原作の構造をアニメ的に再現してみた実験としては意義があろうが、普通にアニメを楽しみたい多くのファンにはそれを受け止める度量がなかった。ハルヒだから許されると制作側が考えていたとしたら、それは誤算であった。
4. 正確には「この12年間エヴァより新しいアニメはありませんでした」。2007年に発表された「我々は再び、何を作ろうとしているのか？」と題するポスターにより。
5. 前島賢『セカイ系とは何か：ポスト・エヴァのオタク史』（ソフトバンククリエイティブ、2010）によれば、これは「セカイ系」とも置き換えられる。ただし本稿では、「ポスト・エヴァ」を、エヴァ後のアニメ史というより、講演会での山本の言葉遣いにあ

る「エヴァに並ぶ／エヴァを超える大作」という意味で用いる。

6. ただし「けいおん！」に、冒險や葛藤が全く見られないわけではない。
7. 実際は、初回版は前後編の抱き合せ販売であるため、各51万3000部である。
8. 土居豊『ハルキとハルヒ：村上春樹と涼宮ハルヒを解読する』（大学教育出版、2012）113頁によれば、その原因は同時期に発表された村上春樹の『1Q84』にあると言う。
9. そうであるがゆえに、今後もハルヒのストーリーをこれまで通りに継続するためには、佐々木は今回限りで退場せざるを得ない「ゲストキャラ」の役回りに甘んじなければならない。佐々木の再登板を望むファンは多いであろうが、作者自身も、スニーカー文庫編集部編『OFFICIAL FANBOOK 涼宮ハルヒの観測』（角川書店、2011）177頁にて、「今回限りの登場人物」と認めている。
10. 例えば、ハルヒ「親友（笑）」佐々木「SOS団（笑）」、と題するSSは、何度読んでも楽しめる秀逸な作品である。
11. 「新世紀エヴァンゲリオン」第26話（最終話）において、「もうひとつの可能性」として描かれた、敵との戦いもない平和な日常世界。
12. 「銀河系、それどころか全宇宙にまで広がる情報系の海から発生した肉体を持たない超高度な知性を持つ情報生命体であり」「実体を持たず、ただ情報としてだけ存在するそれは、いかなる光学的手段でも観測することは不可能」と説明されている。谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』（角川書店、2003）120頁。
13. コンテンツ文化史学会2011年大会（2011年12月3、4日、於東京大学）における三宅陽一郎氏との質疑応答による。

（受付日：2012年9月23日）